

東方キリスト教における死生観

袴田 玲

ただいまご紹介いただきました、袴田玲と申します。本日は「東方キリスト教における死生観」というテーマでお話しさせていただきたいと思えます。どうぞよろしくお願ひします。

1 人間神化の思想

東方キリスト教における死生観を考えるにあたって、そもそも東方キリスト教において人間というものがどのような存在として捉えられているか、という点にまずは触れておきたいと思えます。

東方キリスト教の人間観の中心概念に「神化(テオシス θεωσις)」というものがあります。もともとこの言葉はギリシア語で「神(テオス θεός)にする」という意味を持っており、キリスト教以前の古代から使われておりました。そしてこの語はキリスト教、とくに東方キリスト教の文脈において、非常に重要な思想を担うこととなります。

同じセム系一神教であるユダヤ教やイスラームと同様に、本来キリスト教においても、創造主である神と、その他一切の被造物は存在論的に厳しく分けられます。

全知全能の創造主である神に対し、人間は被造物の一つであり、両者の間には大きな隔たりがあります。そして、『旧約聖書』に端的に表現されているように、神と人間は主人と僕しもべの関係性にあると言えます。それなのに、人間が神になるなどという発想がどうして出てくるのか、もつと言うならば、人間神化の思想は神への冒瀆なのではないか、そんな疑問が抱かれるとしても不思議ではないのです。

ところが、実際には神化という言葉は東方キリスト教において広く受け入れられており、とくに修道生活においては人間の到達すべき一つの目標として神化への道が語られます。この神化概念の基礎になっているのは、東方キリスト教における肯定的な人間観、大森正樹先生の言葉を借りるならば「健康な楽観主義ともいふべき確信⁽¹⁾」であると考えられます。人間は創造の当初から「極めて良い⁽²⁾」ものとして存在しており、アダムとエバによる逸脱があつたとしても、それは神の受肉によつてすでに贖あがなわれている。そればかりか、神が人間となりイエス・キリストとしてこの世に降りて

来られたのだから、人間もまた聖なるものとなり神の近みへと上昇することができる。こんな風に要約することができると肯定的な人間観を東方キリスト教世界はおおむね共有していると言つてよいかと思います。

この点をもう少し詳しく見てみたいと思います。「創世記」には「神が人間を自らの像と似姿によつてつくつた」という表現があります。いろいろな訳され方をするので日本語で読むとはつきり分からない場合がありますが、正教会で使われる『七十人訳聖書』のギリシア語本文でははつきりと神の「像(エイコーン eikon)」と「似姿(ホモイオーシス homoiōsis)」によつて人間は創造されたこと記されています。つまり人間は元来、神に似たものとして創造され、エデンの園で平和に生きていたわけです。

ところが、神の言いつけを破り、エデンの園の中央に生えていた善悪の知識の木から実をとつて食べてしまったために、人間の祖であるアダムとエバはエデンの園から追放されてしまいます。アダムとエバが神に背いた結果、人間には死すべき運命が定められ、男に

は労働の、女には出産の苦しみが課せられるようになる。このアダムとエバの罪を非常に重く見るのがカトリック教会の伝統でして、人間の祖であるアダムとエバの罪は全人類に及んでおり、イエス・キリストとその母であるマリアを除いて誰もその罪から逃れられてはいないと考えます。これがいわゆる原罪の思想ですね。カトリック教会では神の受肉もまた人間の罪に結び付けて解釈されます。つまり、神は人間の罪を贖うために自ら人間となって地上に降り、神自身に罪がないにもかかわらず人間の罪を代わりに背負って十字架にかかり、死ぬわけです。十字架上の贖罪、犠牲者としてのイエス・キリストのイメージが前面に出ています。

それに対して、同じキリスト教でも東方キリスト教においては、人間の原罪がそこまで強調されません。確かに、アダムとエバの逸脱によって人間は神の「似姿」としての身分を失ってしましますが、神の「像」としての身分は何らかの形で人間はずっと保っていると東方キリスト教の思想家の多くは考えます。さらに、神

の受肉が決定的に人間の救済の道を開きます。神の受肉と十字架上の死によって、人間はその罪を赦されるだけでなく、ひとたび失ってしまった神の「似姿」としての姿を回復できるようになるということです。アタナシオスや証聖者マクシモスといった東方の教父たちは、神の受肉の目的は人間の神化であるとはつきり述べています。そして、アトス山の修道士（ヘシユカスト）であれば修道の道を歩み、街の信徒であれば日々の生活においてイエス・キリストの法に則って生きるなかで、人間は各々が聖なるものへと変容してゆけるのだ、そのような信念に彼らの思想は貫かれているように見受けられます。このように、原初的に良いもの、神に似たものとして創造されたという人間理解が基礎にあつて、アダムとエバの逸脱によって一度は損なわれる「似姿」も、神の受肉によって再び回復され、人間本来の「極めて良い」姿に戻るといふ、ある種の円環的かつ樂觀的な人間観を東方キリスト教はもともと持っているわけですね。この点をご理解いただくと、今日のテーマである「死及び復活」ということについても少しわ

かりやすくなるかなという気持ちでおります。

2 イエス・キリストの死をめぐつて

——死と復活

さて、本日お配りしているレジュメと『新約聖書』からの引用がお手許にあると思いますが、「東方キリスト教における死生観」を考える上で、キリスト教のそもそもの始まりとも言える「イエス・キリストの死」というものを少し考えてみたいと思います。

先ほど「セム系一神教というのは神と人間との間の距離が大きく、その存在論的な差異を強調する宗教だ」と申しましたが、その中であってキリスト教というのはこの大原則を派手に打ち破った宗教であると言えます。というのも、全知全能で欠くところのない神が、わざわざ人間という限りある不自由な姿をとってこの世に現れ、人々にとつて目で見て手で触れられる存在となったわけですから。『旧約聖書』つまりユダヤ教の観念においては決して同列に並ぶことのなかった主人と僕しもべが、キリスト教においては友として共に生きる関

係に入るので。『新約聖書』中の「ヨハネによる福音」にあるイエス・キリストの言葉はこのことをはっきりと告げています。「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはやわたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているかを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ⁽³⁾」。そしてさらにすごいことには、神であるはずのイエス・キリストが迫害され、捕らえられ、様々な侮辱と苦しみを受けた挙句、十字架にかけられて殺されてしまうということです。イエス・キリストは神であるはずなのに死んでしまった、この事実からキリスト教会は出発しなければならなかったとも言えるわけです。イエスに付き従っていた弟子たちでさえ、イエスが捕らえられるに及んで一度は逃げてしまうのです。したがって、イエスの十字架上の死をその場で見届けるのは、男性の弟子たちではなくマグダラのマリアをはじめとする何人かの女性たちです。

しかし、三日間の死の後に、イエス・キリストは復活します。そして、その後四十日にわたって弟子たち

と共に過ごし、昇天し、今は父なる神の右の座にいる。受肉から始まった神の地上における様々な行い、受難、そして復活と昇天。ユダヤ教的な神観念からすれば「あり得ない」これら一連の出来事、それを信じるのがキリスト教の根本的な信仰であり、その「あり得ない」出来事にこそ神の人間に対する最大の愛を看取するというのがキリスト教の伝統であると思います。

イエス・キリストの身体とその画像表現

ところで、イエス・キリストは死の二日後に復活するとき、何か幽霊のように蘇るのではなく、身体を伴って復活します。そしてその後昇天するときも、身体ごと天に挙げられ、今も父なる神の右の座にいると信じられています。したがって、原則としてイエス・キリストの遺体というものはいまこの地上には存在していません。この点は、お釈迦様の遺骨を仏舍利として大切にされている仏教の伝統と対照的な点かもしれませぬ。

そもそも身体というのは、ギリシア哲学においては

質料、つまり材料であって、滅びるもの、儂いものとされてきました。プラトン主義、あるいは新プラトン主義の文脈では一層顕著になるのですが、彼らの考え方によると人間は物質的・質料的な存在から脱していかなければいけない。つまり、人間は自らを浄め、魂を物質的・質料的なものから限りなく遠ざけてイデアの世界へと向かっていかなければならないとされたわけです。一方、神あるいは一者というのは純粋なイデアなわけですから、その神がわざわざ身体という質料を取るなどというキリスト教の考え方は彼らにとっても非常にスキャンダラスな発想なわけです。少し話が遠回りになってしまいかもしれませんが、ここで「イエス・キリストの身体」について掘り下げて考えてみたいと思います。

実は、私はもともと身体論に興味がありまして、かつてはフランスの哲学者のメルロ＝ポンティを研究しようと考えていた時期もあったくらいでして、東方キリスト教に最初に興味を抱いたのも、身体がきっかけだったんです。それまでは、キリスト教というと哀れ

な姿で十字架につけられたイエス・キリストの像が最初にイメージ的に浮かびましたし、キリスト教思想において人間の身体というと何か人間の欲望を代表するかのような、あまり良くないものとして捉えられているという漠然とした印象を持っていました。正直言つて、なんだか暗いなと思つてあまり好きではなかった。そしたら、あるときに、カトリック思想を専門とされている先生が、「そう言えば、東方のアトス山とか、ギリシアのほうには何か座禅みたいな変わった修行をする修道士たちがいるみたいですね」と授業中にちょっと触れられて、アトス山と呼ばれるギリシア北東部にある東方キリスト教の聖地には、自らの庵の中で身体を丸めた姿勢を取つたり、呼吸を調整したりして心身統一を図り、孤独に祈り続ける修道士たちが存在していたということをお話ししてくださいました。これがヘシカストと呼ばれる修道士たちのことで、その後今に至るまで私が勉強している対象なのですが、彼らのようにいわゆる身体技法を伴つた祈りを発達させた事例というのはキリスト教世界においてはあまり見ら

れないのです。けれども、そのような祈りの基礎には、身体に対する或る肯定的な捉え方があって、それは日本人に馴染みのある西方のキリスト教思想とは少し異なる、東方キリスト教に独特な発想であるようなのです。そんなわけで、今日も身体というモチーフに注目しながらお話を進めさせていただきたいと思つていきます。

さて、イエス・キリストの身体です。その東方的な捉え方がよく現れている例として、東方キリスト教の教会装飾や美術表現に見られるイエス・キリストのイメージについて少し見てみたいと思います。皆さまの中にはブルガリアで博士論文を書かれた方や、グレゴリオス・パラマスの論文を書かれた方もいらっしゃると思いますが、東方キリスト教についてご存知の方も多いのかもしれませんが、一般的な日本人にとって、キリスト教の教会というとカトリックやプロテスタントの教会の姿がまずは頭に浮かぶのではないのでしょうか。つまり、十字架にかけられた半裸のイエス・キリスト像を中心に様々な聖人像や聖書中の場面を表現し

たステンドグラスで飾られたカトリックの教会や、あるいは十字架だけがシンプルにすつと飾られてあるようなプロテスタントの教会の姿です。そういう方がロシアやルーマニアなどの正教圏の教会を見ると、想像されていたイメージとあまりに異なっていて驚かれるのではないのでしょうか。同じキリスト教とは思えないかもしれません。

モスクワの赤の広場にある有名な聖ワシリー大聖堂はその中でも独特な姿をしています。ロシア正教会の教会の多くは「玉ねぎ頭」と表現される丸いドームが特徴的な外観をしています。しかも十字架はただの十字架とした十字ではなくて、罪状書きと足置き台が付いた八端十字という形が一般的です。しかも、この足置き台は、イエス・キリストから見て右側が少し上っています。なぜ、右側が少し上がっているかというところ、イエス・キリストと共に十字架刑に処された二人の盗賊の内、左側の盗賊は「お前はメシアだと言うなら、自分自身と我々を救ってみろ」と大変罵つたのに対し、右側の盗賊はイエス・キリストが神であることを信じ

て「イエスよ、あなたの御国においてになるときは、わたしを思い出してください」と言つて死んでいったという『新約聖書』中の記述⁽⁴⁾がありまして、東方キリスト教の伝統では左の盗賊は地獄に落ちたが、右の盗賊は天国に行つたとされるのですが、そのことを、イエスの足置き台の右側を上げることで表現しているんですね。

次に教会内部を見てみますと、ロシアの教会でまず目に留まるのが、この「イコノスタシス」と呼ばれる壁のようなものです。この壁は至聖所と呼ばれる場所、つまり祭壇があつて一般信徒の入ることができない空間をその他の空間から仕切る役割を担っています。ここに扉があつて、さらにその左右も扉になつていて、奉神礼（聖体礼儀）のあいだに司祭が二つの空間を行ったり来たりすることができるようになっています。キリスト教では聖体礼儀の中でパンと葡萄酒がイエス・キリストの体と血に変化すると信じられていて、それに与る^{あずかる}、それを頂くことがこの儀式の中心になるわけです。ロシア正教会をはじめとする東方キリスト教の

奉神礼で、司祭はイコノスタシスの奥にある至聖所に入ってパンと葡萄酒を持って祈りを捧げ、それによってパンと葡萄酒はイエス・キリストの聖なる体と血へと変化します。その変化したパンと葡萄酒を再び司祭が至聖所から持って出て来て、儀式の最後に信徒がそれに与るわけです。聖体礼儀のクライマックスともいえる聖変化はイコノスタシスによって信徒の目から隠されてしまいますが、そのことによって神祕が神祕として保たれるという効果もあるわけですね。長時間におよぶ儀式のあいだ、信徒はイコノスタシスに向きあひながら祈りを捧げますので、とくに文字を読むことができなかった中世の信徒にとって、イコノスタシスに飾られているイコンから得る印象というのは、聖書や儀式の内容を理解するにあたって大きな影響を与えたと考えられます。

イコノスタシスにはたくさんのイコンが飾られています、時代や地域やそれぞれの聖堂による違いも大きいのですが、飾られるイコンの題材や並べ方には大まかな規則があります。この点を詳しくご紹介していると

時間がなくなってしまっているので省きますが、お手元の写真をご覧になってみてください（次頁図1）。これは16世紀にロシアで使われていた「移動式イコン」の中心部分ですが、注目していただきたいのは、西方のキリスト教会では必ずと言っていいほど中心に据えられている「磔にされたイエス・キリスト」の姿があまり目立たないという点です。いかがでしょうか、カトリックの教会でよく見かけるような、半裸で血を流し十字架につけられているイエス・キリストの姿がすぐに見当たりますか？ もちろん、イエス・キリストの磔刑は東方キリスト教会にとっても欠くことのできない重要なテーマですし、イコノスタシスにも磔刑のイコンは配置されますが（この写真では向かって右から二番目上段）、中心となっているのは疑いようもなく「全能者キリスト（パントクラトル）」のイコンです。このイコンは福音書を手に威厳に満ちた表情を浮かべるキリストの姿を描いたもので、キリストの神性、全能性が表現されています。この他にもイコノスタシスには様々な形がありますが、「全能者キリスト」の画像が中心に据



図1 移動式イコノスタシス（デエーシス、部分）。1560年代、モスクワ。

板、ゲツ、テンペラ。左から大天使ミカエルとキリストの洗礼（134×36 cm）、聖母マリアとラザロの復活（134×34 cm）、栄光のキリストとエルサレム入城および主の変容（134×66 cm）、洗者ヨハネとキリストの磔刑（134×33 cm）、大天使ガブリエルとキリストの陰府降り（134×33 cm）。クレムリン武器庫博物館所蔵

えられるという点においてはほぼ一致しています。また、教会の天井部分にあたるドームの内側にも全能者キリストの図が描かれます。このように、東方キリスト教の教会装飾の中心に描かれるのは、全能者として光輝く莊嚴な姿のイエス・キリストであって、決して、傷つき憐れな姿となった十字架上のイエス・キリストではないのです。

ゲッセマネの園における祈りと

タボル山における変容

このように東西キリスト教会間におけるキリストの図像表現の差異を今見ていただきましたが、このような図像表現における違いはイエス・キリストという存在をめぐる神学的思索に裏打ちされています。ウラジミール・ロースキーという高名な亡命ロシア人の神学者は、西方のラテン神父と東方キリスト教のギリシア神父とを比較して、前者が『新約聖

書』中のゲッセマネの園におけるイエス・キリストの姿を思索の中心に据えて靈的暗黒の神学を發展させたのに対し、後者は『新約聖書』にあるタボル山におけるイエス・キリストの姿を思索の中心に据えて光の神学を發展させたと分析しています。⁽⁵⁾ それでは、東西キリスト教会におけるキリスト観をそれぞれ形作ったとされる聖書中の二つの場面を見てみましょう。まずは、ラテン教父が重視したというキリストのゲッセマネの園における祈りの場面です。『新約聖書』には次のように書かれています。

イエスがそこを出て、いつものようにオリブ山に行かれると、弟子たちも従った。いつもの場所に来ると、イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた。そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこころ祈られた。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、私の願ひではなく、御心のままに行ってください。」すると、天使

が天から現れてイエスを力づけた。イエスは苦しきみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子達のところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。イエスは言われた。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」⁽⁶⁾

これに対して、東方の教父たちが思索の中心に据えたと言われるタボル山における主の変容の場面は次のように記されています。

六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。(略) ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。⁽⁷⁾

さて、この二つの場面でイエス・キリストはどのように描かれているでしょうか？ ゲッセマネの園においては、地にひざまずき（あるいは「うち伏し」（マタ26・39））苦しむイエスの姿が描かれています。そのとき、イエスの身体からは「汗が血の滴るように地面に落ちた」と書かれています。さらに、ゲッセマネの園の祈りに続く「受難」の場面では、イエス・キリストは心身へのさまざまな侮辱を受け、傷つけられ、血を流し、十字架に架かり、絶命します。それに対して、タボル山上のイエスは、その「顔が太陽のように輝き、服は光のように白く」なったと言われる「栄光のキリスト」の姿です。

また、この二つの場面では、イエスの身体だけでなく使徒たちの身体性についても触れられています。ゲッセマネの園の場面では、使徒たちは「眠気」という身体的誘惑に惑わされ、対抗することのできない「弱き身体」⁽⁸⁾の体現者とされているのに対して、タボル山の場面では、使徒たちもまた「光輝く雲に覆われた」とあり、東方キリスト教の伝統では「彼らもまた光り

輝いた」と解釈されることが多かったのです。

東西の教父たちが聖書におけるこの対照的な場面を元にそれぞれキリスト観を形成していったというロースキーの指摘が正しいとすれば、これまでに私がお話しさせていただいたような東西のキリスト教会間におけるキリストの画像表現の差異というものも必然であるように思われませんか。実際、タボル山における主の変容は東方キリスト教のアイコン画家たちに好まれて描かれてきたモチーフでして、「全能者キリスト」ほどではないにせよ、東方キリスト教の教会内で重要な位置を占めるアイコンの一つです。先ほどご覧いただいたイコノスタシスでは、中心にある「全能者キリスト」のすぐ上の向かって右側にあるアイコンがそれにあたります。「主の変容」をモチーフとしたアイコンには様々な傑作が生まれておりますので、今後皆様がお目にする機会もあるのではないかと思います。

「死によって死に打ち勝つ」という思想

さて、もう一度イエス・キリストの死の場面に話を

戻しましょう。十字架につけられ絶命したイエス・キリストは、その日のうちに十字架から降ろされ、亜麻布に包まれて墓に葬られます。『新約聖書』にはこの日が安息日の前日であったと記されているので、当時イエスが生きていたユダヤ教の伝統では金曜日にあたります。そして安息日を過ぎた翌日曜日、その死から数えて三日目にイエス・キリストは復活し、人々の前に姿を現します。そして四十日の間、弟子たちと共に食事をしたり、神の国について話したりしたと言われています。その後、イエス・キリストは天に挙げられ、人々の目からは見えなくなってしまうですが、今も父なる神の右の座にあり、世の終わりのときに再び現れて人々を裁くと信じられているわけです。イエス・キリストの死と復活そして再臨と最後の審判はキリスト教にとって非常に重要なテーマであるわけですが、ここで注目したいのがイエス・キリストの死と復活の間の時間です。

さきほども申し上げましたとおり、イエス・キリストの遺体は金曜日に磔刑に処され日曜日に復活するま

での間、岩に掘られた墓の中に安置されていました。聖書にはその間のイエスについての記述はほとんどありませんが、キリスト教の伝統ではこの間にイエスは「陰府よみに降っていた」と解釈されています。陰府とはギリシア語のハデスήιδηςの訳語で、冥府や黄泉という訳語があてられることもあります。キリスト教以前から存在した言葉ですが、死者の行く場所として『聖書』においてもたびたび出てきます。例えば、『ルカによる福音書』16章19節以下に「金持ちとラザロ」のお話があります⁽¹⁰⁾が、その中で金持ちは死後に「陰府でさいなまれ」、⁽¹⁰⁾「炎の中でもだえ苦しんでいる」と書かれています。

陰府の位置づけについては、死後の人間の運命に関する複雑な問題が絡んでくるので今日はあまり立ち入らないことにしますが、キリストの再臨と万人の復活後にある最後の審判——これらは多くのキリスト教徒が世の終末に起こると信じている一連の出来事ですが——、その結果人間が決定的に振り分けられる天国や地獄とはまた違う段階において、それにふさわしいと

された個々の人間が死後すぐに向かう場所であるとしてありえず考えておけばよいかと思えます。

さて、イエス・キリストはその死後、陰府に降って何をしていたのでしょう？ このイエス・キリストの陰府降下をめぐる解釈についても、東西のキリスト教会の間には大きな隔たりがあるようです。久松英二先生という日本の研究者が最近書かれた本にこの点分かりやすくまとめられていますので、ご関心のある方はぜひそちらを参照していただきたいと思えますが、久松先生のご見解を道しるべとしながらこの点に関して少しご説明したいと思えます。

ここにあるイコンをご覧ください（次頁図2）。これは十六世紀前半のロシアのイコンですが、ここには陰府におけるイエス・キリストの姿が描かれています。赤い衣を纏い中央でダイナミックに体を広げているのがイエス・キリストその人で、両足を踏ん張り、右手でアダムの、左手でエバの手をとって彼らを棺から引き起こしています。アダムとエバのまわりにはやはり『旧約聖書』に登場する預言者や族長たちが配置され、

上部には秤を持った天使たちが描かれています。下部には壁で仕切られた洞窟があり、見えにくいですが左右には捕らえられた悪魔が天使によって打たれています。洞窟中央には踏みつけられた陰府の門が描かれ、その間には復活した『旧約聖書』の義人たちがいます。このイコンが「復活」と題されていることから明らかにおり、ここでイエス・キリストは死（悪魔）を打ち破り、彼以前に死んだ者たちを死から解放して復活へと導いているのです。

先ほどからお伝えしているとおり、時間軸の上では、イエス・キリストの陰府降りはその死と復活の間に起きる出来事です。しかし、このイコンに描かれているイエス・キリストをご覧になると分かるとおり、その姿は生命力に満ち、すでに復活を先取りしています。そればかりか、死者を復活へと導く力強さを湛えています。要するに、東方キリスト教において陰府降りというテーマは、既に復活の方に引きつけて解釈されているのです。陰府という死の底にまで到達し輝きわたる復活の光、それは「死に対する勝利」の思想の表れ



図2 アナスタシス(復活Ⅱ陰府降り)。16世紀前半、ブスコフ板、テンペラ(54×45cm)。トレチャコフ美術館所蔵

です。つまり、「イエス・キリストはその十字架上の死によって全人類の死に打ち勝ち、人間を復活へと導いてくださる」という信仰をこの陰府降りの図像は表現しているのです。

イエス・キリストの陰府降りに対するこのような東

方的態度に対し、対照的な姿勢を示すのが西方のカトリックやプロテスタントの思想家たちです。久松英二先生は、近現代のカトリックおよびプロテスタントの神学者たちが、陰府降りを十字架上のイエスが味わった絶望感や孤独感、神に見捨てられるという試練の経験と同定し、その死の現実性・悲劇性を象徴するものとして捉えていると分析されています。そして、陰府降りという表象は「イエスの死の悲劇的側面を強調する補助的機能」として理解されており、「その死における『謙卑』(ケノーシス)の究極的深み」として解釈されていると述べられます。つまり、神であるはずの存在が自らを卑しいものとして人間となった。それは謙り^{へりくだ}とか、自らを無にする(ケノーシス)などと表現されますが、さらにその極みとして十字架上の死があり、その徹底として陰府にまでいくという解釈ですね。それほど謙り、それほどの犠牲ということを強調して、犠牲者としてのイエス・キリストの姿に思いを巡らせるのが西方的態度であるというわけです。少し長くなりますが、この点に関する久松先生の分析を引用したい

と思います。

西方教会のこのような理解には、その背景としてキリストの死のパウロ的贖罪論が横たわっているように思われる。パウロによれば、キリストの死は徹頭徹尾贖罪の業、つまりアダムとエバの犯した原罪によって台無しにされた人間本性の治癒のために、その代償として払われた犠牲の死である。その死の犠牲性が大きいほど、そこからもたらされる贖罪効果も高くなる。したがって、キリストの死は徹底して際限のないマイナスでなければならなかった。死の底知れぬ悲劇性、苦痛、過酷さが強調されればされるほど、十字架の恩寵は輝きを増す。この傾向は中世以降、顕著になる。中世以降の西方の十字架の図像に、イコンに見られるような威厳に満ちた「勝利のキリスト」ではなく、「苦悩のキリスト」と呼ばれる、十字架のキリストの悲劇性をモチーフとするタイプが圧倒的に多いのもそのためである。このような十字架観が陰府

への降下の表象を、死を底知れぬ暗黒の体験として強調する補助的契機と見なす西方の解釈を決定づけているように思われる。

これらはあくまで一般論で、例外ももちろんあるわけですが、神の死をめぐる態度が東方教会と西方教会で非常に明確に分かれる、それがこの「陰府下り」にまつわるイメージ群であると言えるでしょう。

3 復活の先取りと不朽体

ところで、先ほどご説明しました「タボル山における主の変容」の出来事は、ヘシユカストと呼ばれるアトス山の修道士たちにとって、とりわけ重要な意味を持つものでありました。彼らは人里離れたアトス山にある自らの庵に籠り、自分自身と向き合い、自らを注意深く吟味しながら不断に祈ることで、浄化の道を歩み神化の恵みに浴することができると考えていました。そして、神化の恵みに浴して神と一つになるとときには、それを体験として実際に身体の内感によって感じるの

だと主張しました。つまり、神化というものはただの思弁的な構築物ではなくて、実際に体験することが可能な一種の神秘体験であるというわけですね。その中でもとくに重視されたのが、光の体験です。修道の道行を歩む中で、それにふさわしいと神によって見なされたとき、彼らは神を光として見る事ができる、いやむしろ、自らもまた光となって、光である神と一体化することができ、このように信じていたのです。そして、この光こそ、タボル山上でイエス・キリストが変容した際にその身体を照らし輝かせた光と同じものだと彼らは主張しました（次々頁図3を参照）。ここで重要なことは、タボル山上の光がイエス・キリストの再臨に伴う復活の光の先触れとされる点です。

再臨というのは、復活し今は天に挙げられているイエス・キリストが世の終わりに再び地上に降り立つというキリスト教徒の信仰内容の一つですが、その際にイエス・キリストは光を纏った栄光のキリストの姿で人々に現れると信じられています。そして、その時に死者の身体は復活して再び魂と結合し、生ける者とも

ども裁かれて天国か地獄かに振り分けられる（最後の審判）とされるわけですね。それに対してタボル山における主の変容は、イエスの地上における生のただ中、まだ十字架につけられる前に起きた出来事なわけですが、しかし、主が突然光り輝くというタボル山上のこの出来事において、イエス・キリストは自ら死後に復活し、栄光の姿で再び現れることを予見的な形で弟子たちに示したのだと、そのように東方の教父たちは解釈しました。つまり、タボル山における主の変容は復活の先取り、栄光ある再臨の先取りというわけですね。アトス山で修行に暮れていたヘシユカストは、聖書にあるこのタボル山における復活の先取りの出来事を大変に重要視しました。そして、彼らもまた修行を極めていく果てにはこの光に与ることができると信じたのです。「ヘシユカスムの博士」と呼ばれるグレゴリオス・パラマス（1296頃・1359）はこの点を次のように述べています。

もしタボル山で生じた主の変容が、来るべき栄光

における神の可視的顕現の序奏であつて、これを使徒たちが身体の眼によつて捉えるに値するときは、れたならば、何ゆえ、心における浄めがすっかり完了した人々が、知性^{ヌイス}に応じた神の顕現の序奏と手付金とを、いまや魂の眼によつて受けとらないことがあるか？（中略）どうして主は、私たちの内にある彼の身体的な光明を通じて、しかるべき仕方で分有する者たちの魂を照らし渡し、照明しないことがあるか——タボル山において弟子たちの身体すら照明したのであるというのに？ というのも、その時にはまだ、恵みの光の泉をもつ、かの身体は私たちの身体に混ぜられていなかったもので、近づく者たちのうち、しかるべき人々を外側から照明し、感覚的な眼を通じて魂に輝きを送り込んだのであるが、いまや恵みの光の泉をもつ、かの身体は私たちにすっかり混ぜられ、私たちの内に在るので、内側から魂を照らし渡すというのが、道理だからである。⁽¹²⁾

聖体礼儀のなかでイエス・キリストの体と血に変化したパンと葡萄酒を信徒がいただくことを領聖と言いますが、復活の光に与るためには領聖が非常に大きな役割を果たすというパラマスの考え方がこの文章の下敷きになっていまして、本当はそういうコンテクストをきちんとご説明しなければならぬのですが、あまり時間がなくなってきました。重要なのは、タボル山で生じた「主の変容」が来るべき終末における神の顕現の序奏であつて、それを使徒たちが肉眼によつて見るに値するとされたのならば、いま修行に励んで自身を浄め、領聖によつてイエス・キリストの身体に与っているヘシユカストたちも当然、そのような神の顕現における光を魂に受け取り、照明されるのだとパラマスが主張しているということです。

ところで、先ほどから見てきたとおり、東方キリスト教において復活というのは死に対する勝利です。イエス・キリストはもちろん、世の終わりにおいて復活を果たした人間も、永遠の命を得てもはや死ぬことはありません。ということは、修行を重ね、徳を極めて



図3 主の変容。15世紀後半、モスクワ、板、ゲッソ、テンペラ（115×87cm）。クレムリン武器庫博物館所蔵

すでにこの世において復活の光に与る者は、生きながらにしてその不死性に何らかのかたちで参与することができます。そんなふうに信じられるようになります。東方キリスト教には不朽体といって、聖人などの身体の一部で、死後も腐敗せずに残ると信じられている遺

物があり、教会などに安置されて今日でも崇敬の対象となつていますが、それを思想的に支えているのが「復活の先取り」や「不死性への参与」といった、今ご説明してきたような考え方だと言えるわけですね。ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の中で、ゾシマ長老の死後にアリョーシャや他の人びとが、長老ほど徳のある人だからその遺体も腐らないだろうと期待していたら、すごい腐臭を発して腐敗してしまつて非常にショックを受けるといふ印象的な場面があります。このアリョーシャの期待もこのような考え方に裏打ちされているのです。

今日お話しさせていただいたような死後の復活やその現世における先取りなどという発想は、今日の日本人の多くにとつて馴染みのない考え方もかもしれませんが、東方キリスト教世界では理性的思考の支配する近現代においてなお、或るリアリティをもつて信仰されていると言つてよいかと思えます。今でも東方キリスト教圏の人びとには火葬に対する嫌悪感が根強いと言われますが、これもその一例でしょう。科学的な証明

は不可能であるとしても、人びとは死後の世界について漠然としたイメージを持っており、そのイメージは地域の伝統的な宗教がこれまでに築いてきた死生観に強い影響を受けているように見受けられます。もっと言うならば、そのような死後の世界にまつわるイメージが、現世における各々の生き方までも規定している面があります。宗教離れが進んでいると言われる現代においても、人びとの死生観にはなおその影響力が直接的に及んでいると言えるでしょう。どうもうまくまとまりませんでした。時間もまいりましたのでこれをもって本日のレクチャーを終わらせていただくと思います。長らくのご清聴、どうもありがとうございます。

注

- (1) 大森正樹、『エネルギーと光の神学—グレゴリオス・パラマス研究—』、創文社、2000年、71頁。
 (2) 創1・31(以下、『聖書』からの引用は新共同訳による)。
 (3) ヨハ15・14・15
 (4) ルカ23・39・43

(5) V. Lossky, *Théologie mystique de l'Église d'Orient*, Paris, 1944, p.223. 『キリスト教東方の神秘思想』(宮本久雄訳)、勁草書房、1986年、272頁。また、

日本における東方キリスト教研究の代表的存在である宮本久雄、大森正樹両氏もロースキーのこの指摘を引用しつつ、東西教父の思想的差異を考察している。宮本久雄、『教父と愛智—ロゴス(言)をめぐる—』、新世社、改定増強版第一刷1990年(初版1989年)、73頁、大森正樹、上掲書、75・98頁。

(6) ルカ22・39・46

(7) マタ17・1・8

(8) 「マタイによる福音書」では「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」とイエスは言ったとされる(マタ14・37・38)。

(9) 『新約聖書』に取められている「ペトロの手紙」の中に、死から復活までの間のイエス・キリストの姿とも解釈しうる記述がある。「キリストも、罪のためにただ一度苦しみました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しみましたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです。そして、霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました。」(一ペト3・18・19)

(10) ルカ 16 : 19 : 31

(11) 久松英二、『ギリシア正教 東方の智』、講談社選書メチエ、2012年、151・170頁。

(12) グレゴリオス・パラマス、『聖なるヘシユカストのための弁護』、1・3・38。

(はかまだれい／日本学術振興会特別研究員)

※2015年6月9日に行われました。